

第二次小平市教育振興基本計画検討委員会第1回会議要録

- 開催日時 令和3年11月4日(木) 午前10時～11時50分
- 開催場所 市役所大会議室
- 出席状況 (委員) 出席12人
(事務局) 教育長、教育部長、地域学習担当部長、教育総務課長、学務課長、教育施策推進担当課長、地域学習支援課長、中央公民館長、中央図書館長
- 傍聴者 なし

○会議の概要

1 開会

事務局より開会が宣言された。

2 依頼状交付式

教育長より各委員へ依頼状の交付を行った。

3 教育長挨拶

教育長 本日はご多用の中、第1回第二次小平市教育振興基本計画検討委員会にご出席いただき御礼申し上げます。また委員をお引き受けいただき、感謝申し上げます。

教育振興基本計画は小平市が目指す教育の方向性、そしてそれを推進するための施策を明示し、総合的、体系的に推進していくものである。

今回、委員の皆様には仮称であるが第二次小平市教育振興基本計画の策定をお願い申し上げますところである。小平市においては平成25年2月に小平市教育振興基本計画を策定し、「自立」「貢献」「共生」を生きる力として捉え、社会的に自立し、地域・社会に貢献しながら、他者と共生する人を目指す人間像として捉え推進してきた。その実現のために具体的な目標を三つ掲げ、施策を展開するにあたっては二つの視点として、連携の視点と個を生かす視点を立てて取り組んできた。その結果、学力の向上、健やかな体、豊かな心の育成など様々な場面で子どもたちの良さが感じられるようになった。また学校・家庭・地域の連携も進んだ。しかしながらコロナ禍での対応、そしてGIGAスクール構想の実現など、新たな課題も出ている。また今後教育に対するニーズも多様化し、その施策を推進するにあたっては柔軟に対応していかなければならないことが数多くある。委員の皆様には、それぞれの立場で小平市の教育が実効的に進むようご指南いただければと願っている。

4 委員自己紹介及び事務局紹介

各委員の自己紹介と事務局の紹介を行った。

5 委員長及び副委員長の選出、挨拶

小平市教育振興基本計画検討委員会設置要綱第4条に基づき、委員長及び副委員長がそれぞれ選出された。

6 委員会運営事項確認について

第二次小平市教育振興基本計画検討委員会設置要綱に基づき、「委員会公開の可否・傍聴について」及び「議事録の公開について」、承認された。

7 議題

(1) (仮称) 第二次小平市教育振興基本計画策定方針等について

事務局より、資料4に基づき教育振興基本計画策定の基本方針について説明を行った。

(2) (仮称) 第二次小平市教育振興基本計画策定スケジュール(案)について

事務局より、資料5に基づき教育振興基本計画策定のスケジュールについて説明を行った。

(3) 小平市の教育に関するアンケート調査の実施について

事務局より、資料6に基づき小平市の教育に関するアンケート調査の実施について説明を行った。

(4) 意見交換

テーマ「今後の小平市の教育について望むこと」

事務局より、現計画の概要と、教育を取り巻く新たな動向について説明を行った。

委員 全体的にたくさんの視点で網羅されていると思った。気になった点が二つある。一つ目が外国人児童または日本語が母語でない児童に対する教育的な支援があまりなかったような気がする。小平市にそのような児童がどの程度いるのかわかりかねるが、まずは現状の把握とそのような児童が将来的に増えた場合にどのように対応していくのかということ視野に入れるべきではないかと思った。

もう一点は性的マイノリティの子どもたちに対する心理的安全性をどのように確保するのかといったことや、学校で強く生きていく生徒をつくってあげるかという視点があった方が良いのではないかと思った。小平市がそういった方向を見ているということが、当事者並びに周辺の人たちに対して安心感を与えられるのではないかと思う。小さな配慮から始まるのではないかと思う。

委員長 今、求められている多様性、お互いに認め合い励まし合う、共に生きる社会、小平市の現行のテーマにも「共生」という柱が入っている。改めてこういったことも議論できればと思う。

委員 一昨年まで10年間小平市青少年委員を拝命し、子ども育成部会に在籍していた。ジュニアリーダー養成講座、シニアリーダー養成講座を行ってきたが、この活動は仲間と協力し合いながら、野外活動や小平市内を歩くといった活動で、この体験を通して子どもたちが成長していく姿を10年間見てきた。個人的には子どもたちが化けると言っているが、最初は消極的だった子どもたちが積極的に物事に参与していくことを多々見てきた。

昨今、コロナ禍で授業も遠隔になり、バーチャルな仮想現実的な世界に移っていき、人と人が直接関係をもつということが難しい時代になってきたと思う。子どもたちが様々なことを体験するリアルな場というものをたくさん用意していくことが、小平市の教育における「生きる力を育む」ということに繋がってくると思う。

リーダー養成講座は小学生40名ほどしか参加できず、小平市の小学生からすると極わずかな子どもたちにしかそのような場を用意できていないが、幸いなことに小平市には青少対などの子どもたちの活動を支援する団体もあるので、地域の大人が何らかの形で関わられるような仕組みをつくり、少しでも多くの子どもたちに様々な体験ができる機会を設けていけるようにできれば良いと考えている。

委員 小中学校で地域教育コーディネーターをしている。それぞれの学校をまわって授業の様子を垣間見ることが多々あり、小学校の先生は休み時間もずっと教室にいるし、中学校の先生たちは職員室にいても生徒がひっきりなしに職員室を訪ねてくるといった状況である。先生方は休む時間がないと思われるほど子どもたちに接してくれている。ここ2年ほどで学習補助員が多く配置されるようになり、更に手厚く子どもたちの授業ができていくし、学校の授業以外でも、地域の方々のボランティアで放課後教室が盛んに行われている。社会教育委員の会議では公民館、図書館のイベント等もたくさん企画していただいているという資料を読ませていただいた。ほんとうに小平市は子どもたちのために十分に尽力いただいていると思っている。

これからの小平市の教育を思うときに、アフターコロナになるのかウィズコロナになるのかわからないが、3年後5年後にコロナによる社会的な後遺症が出なければ良いと思っている。引きこもりや自殺者が出ないようにするには、自尊心や自己肯定感を育む教育を望む。タブレットを用いた授業もコロナ禍で加速したと思うが、これからの時代には欠かせないキャリア教育の一環だと思っている。それで将来の職業の選択肢も増えていくのではないかと思う。しかし、デジタルの部分と伝統文化の部分をバランス良く取り入れていただきたいと思う。ジェンダーやマイノリティに関して、生き辛さを抱えている子どもたちに多様性と柔軟

性をもって対応できる教育で、心身共に健康な子どもたちを育てていただきたい。

委員 冒頭の教育長のあいさつの中でもGIGAスクールというキーワードが出た。今年から子どもたちには一人一台のタブレット端末が配られている状況である。昨年度から全国的にも子どもたちに一人一台のタブレットが配られているが、どのようにこのタブレットを活用すれば効果的であるかという実践研究を行っているところがそれほど多くない状況である。学校現場ではタブレットを有効活用するということができているというのが現状ではないかと思う。オンライン授業や個別最適化といったところを今後の10年を見越してこの計画にどのように盛り込むのかということがポイントになってくる。また、個別最適化を行うにあたっては、両輪として協同的な学びが必要で、個の学びを全体の学びに変えていく力が必要になってくると思う。学校は学び合いの場であり、ここでいろいろな知識を駆使しながら子どもたちは成長していく場だと思っている。リアルとデジタルの世界をどこで線引きをして行っていくかということがこの10年で大切になってくると思っている。

私の学校の教員に居住地の教育振興計画を見たことがあるかと質問してみたが、全員が見たことがないという回答であった。職業として先生をしているのに教育振興計画を見たことがないということは、地域の方々は、さらに見る機会がないと考える。この計画を作成したときにどのように周知していくのかということが課題である。地域の方々の協力という点からも、1%でも今よりも多くの方にこの計画を策定したということが広まっていくとパワーアップしていくと思うので、この点も検討していければと思う。

委員 目標2の「学校・家庭・地域が互いを育て合い、子どもを支えます」について、小平第八小学校は家庭と地域と学校と連携している。そのため子どもと接する機会も他の地域に比べても多いと思っている。子どもたちの教育については、保護者も地域の方も一緒に行っているので良い子が育っているが、その反面保護者に負担が掛かっている。小平市の中でも地域性に差があると思う。市としては地域バランスが取れていないことは問題で、その差を埋めるようなものにしたいと思う。

学習に関してGIGAスクール構想については、授業をどのようにするのかという方向性が定まっていないので小平市は遅れていると感じる。先日埼玉の知人と話したが、その学校は2学期の始まりはオンラインで行っていた。しかし小平市は登校していた。コロナ禍なのでオンラインという話が浮き彫りになったが、今後10年の間には新たな病気が蔓延する可能性もあるし、病気やケガでもオンラインで勉強できる環境を整えれば学習の遅れは発生しなくなると思う。

委員 先生方もこの計画をもとに生徒たちのためにがんばっておられる。学校・地域、先生・地域、先生・生徒・保護者が一体となって子どもを育ててくれていると思える地域である。この場でお話を聞かせていただくと、小平市内では小・中ともに地域の力、先生の力を感じられて、良い子どもたちが育っていると感じられる。しかし、理想はあるが現場はとても負担になっている。個の善意で続いているということも多くなっていると感じる。

昨年、私がPTA会長に立候補しようと思ったのは、子どもが中学校1年生のときにお世話になった担任の先生が、生徒のことを親身になって見てくれた先生で、中学校で生徒一人ひとりをこんなに見てくれる先生がいるのだということを感じて、何か保護者としてお手伝いできることがあれば良いと思って立候補した。しかし、コロナの影響でやりたい気持ちがあっても活動が制限され、歯がゆく思っている。

また、コロナの影響でGIGAスクール構想を急速に取り入れることになり、先生方は普段の授業の他にタブレット端末の操作などの日常的な業務が増えていると感じる。学校の中にいると先生方がとても忙しそうにしていることが心配である。先生方の負担が増えることは、子どもたちに返ってくるので、計画を整えながらも現場の実務のことも考える必要があると思う。部活動も先生方の負担になっている。中学校での部活動は、教育課程外ではあるが、授業の中では学べないこともたくさん学べ、かけがえのない貴重な経験になるので、任意の活動ではあるが部活動ができる環境を整えてほしいと保護者は思っている。現状では部活動指導員などを各学校1名といった規定があると思うが、そこを見直し、現状に合う内容に充実させて先生方の負担を減らし、地域の方や保護者がお手伝いできるような環境を整えていただければと思う。

先生方の業務、また、地域や保護者の活動も持続可能な施策となるよう、現場の意見も反映できる、もう一段掘り下げた内容が加わると良いと思います。

委員 小学校も中学校も児童生徒の実態や地域の実情に応じて、教育目標や教育の重点を定めている。学校の特性やカラーによって違いがあるが、概ね学力向上、思いやりの心、体力向上といった目標が多く、現行の教育振興基本計画では目標1にあたる部分である。しかし、昨今の社会の情勢を見ていると、教育課題は多岐にわたり多様化している。例えばジェンダー、SDGs、気候変動のことなども関わってくると思うので、計画の策定にあたってはこれらのことも考慮すべきではないかと考える。

学校現場では、自ら考えて課題を解決していく力を身に付けるということが大きな目標の一つとしている学校が多い。その際に、GIGAスクール構想やIC

Tの活用といった中では、パソコンやタブレットなどを使いこなせる力や活用できる力はとても重要な要素であるが、パソコンやタブレットばかりに向かっていると個人の作業ばかりになってしまう怖さがある。学校は集団で生活する場であり、人と人とのふれ合い、協力して何かを成し遂げる、他人とコミュニケーションを上手に取る力の育成も学校教育に課せられた大きな役割である。学校だからこそできることを考えていかなければいけないと強く思っている。そこで学校教育を考えたときに、学校だけでは難しく、先生方の努力だけではできない部分も多く、いろいろな経験や体験をさせることについても、地域や保護者の協力が不可欠になっている。小平市においてはコミュニティスクールも増えてきていて、その地域の教育力を生かすという考え方が浸透してきているので、これを生かしていくべきだと思う。現行の計画では目標2「学校・家庭・地域が互いを育て合い、子どもを支えます」ということは、これからも力を入れていくべきことだと思う。アンケートを取ってこの計画に反映していくということなので、多方面からの意見を集約してそれらの思いを生かした新たな基本計画ができれば良いと考えている。

委員 自分の良さや可能性を見つけるといった自己肯定感、他者を価値ある存在として認めて多様な人とともに学ぶといった教育を通して、豊かな人生を切り開いて、将来持続可能な社会の担い手となってくれるような教育ができればと思う。これまでは学んで覚えて一つの答えを出せば良かったが、これからは何を覚えたかではなく、何ができるのかということを考える力がとても大切になってくると思う。基礎的な知識は必要だが、自ら学ぶ力がとても大切になってくるので、そのためにはコミュニケーションがとても必要になってくると思う。コミュニティスクールに見られるように、地域が学校とともに活動することによって、先生方からだけでは得られないような学びがあると思う。たくさんの人々と関わることで、自分の良さや可能性を認識して多様な人と協同しながら社会の変革を乗り越えて持続可能な社会のつくり手となって、人生を切り開いていってほしいと思う。

第六小学校にも不登校の児童がいるが、小平市全体で見ても他市に比べると不登校が多いと思う。第六小学校は学校運営協議会が主体となって不登校支援を始めた。教育はすぐに結果が出るものではないので、学校を卒業してから大人として生きていく中で地域のことを考えてしなやかに行動して、多様な人々とともに生きていける子どもに育てるような教育を望む。

委員 中学生、小学生、2歳児の子どもがいる専業主婦であるが、それぞれの子どものことについて一般の母親目線で感じたことをお話しさせていただく。

2歳の子どものに関しては、共生や地域との関わりについて、コロナの影響で保

育園や幼稚園の予定も含め、専業主婦だと外部との関わりがまったくなくなってしまった。ぜひとも地域で行っている教室や子どもが関わる事業もオンライン化を進めていただきたい。上の子どもたちとの親との交流はあるが、2歳の子どもの同世代の親との交流が途絶えてしまった。初めてのお子さんの子育て中の方は孤立しているのではないかと感じている。

小学校のオンライン化については、遅れていると感じている。先日の授業参観はオンラインで社会科の授業が行われ、児童は楽しそうに発表していた。しかし息子が初めてマスクをしていない顔を見た友だちがいたと言ったことに驚いた。異常な環境下ではあるが、オンラインで繋がっていればできることが増えるように思う。緊急事態宣言中でもオンラインで外部と繋がることができとても助かった。オンラインを選択できる環境を整えていただきたい。

中学生の子どもが給食の後に部活動に行く場合は、部活動までエネルギーが持たないと言う。授業終了後に部活動に行く前に、カロリーメイトなどの軽食などを食べられるようにしてほしい。

これからオンライン化が進むにあたって、知る機会がないと教育格差に繋がる。これからは水・電気・ガスと同じように通信も一つのインフラとして必ず必要になってくる。沖縄の方ではPTAの連合協会と協力して、低所得者世帯の通信環境を整備するという話を耳にした。今後10年の間に絶対に必要になってくることだと思うので、市としてできることを検討する必要がある。

委員

所属は社会教育委員で地元の第七小学校の青少対の役員もやっている。他にも消防団もやっていて25年以上継続している。第七小学校には地域の一員として「はたらく消防の写生会」でも関わっている。写生会で学校に行くと「〇〇ちゃんのお父さん」とか「何をしているの」と声を掛けてくれる。地域の関わり方の一つではないかと思う。

社会教育委員からのお知らせとして図書館の事業では、なかまちテラスティーンズ委員会というものがあり、これはなかまちテラスを会場として、市内の中高生を中心に読書会を開いたり、同世代の人に読んでほしい本を「ティーンズ大賞」として選出したりする活動を行っている。ティーンズ大賞に選ばれた本の作家とオンラインで中高生の皆さんと直接お話をするという取り組みも行われている。また公民館の事業の一つには、子育て中の親の学習支援、孤立の解消、仲間づくりを目的とする子育て支援講座を行っている。地元の大沼公民館では事業企画委員も行っている。社会教育委員としてはこれから学ぶことが多いと思うが、地元ということでお付き合いをさせていただいている。

また保護者の視点としては、コロナ禍においてこれまで継続して行ってきたものが一旦ストップして、新たに何ができるか、何をしなければいけないかという

ことを、子どもたちだけではなく大人も経済活動も含めて見直した中で、何が正解かわからないということを目の当たりにした。このような経験の中で、子どもたちに身につけて欲しいと感じたこと、必要なことは個の力ではないかと思う。個の力というのはいろいろな要素が絡み合って強固なものになると思う。そのためには、体験し自分の中で物事を掴む力を培い、それによって広い視野を持っていくということではないかと思う。

公民館の事業企画委員会に参加していると、高齢者の方は学ぶことに積極的である。小学校・中学校・高等学校・大学といった時期を卒業した方も、常に学ぶことができる大人になっていければ強いのではないかと感じる。また、子どもたちがそのような大人と接することで、コミュニケーション能力を鍛える良い機会になると思う。

青少年活動というのは、先生以外の人と会う、同じ学年ではない子ども同士が会うという体験ができる機会である。

子どもたちは失敗をととても恐れているが、失敗も経験として積んでいけば良いと考えている。自分の自己肯定感を高めて何事も経験として次に繋げていけるような子どもたちに育ててほしいと思っている。

計画の基本的施策の15の体系について、もう少しじっくりしたものでも良いのではないかと思う。これから10年先を見越したときに、きっちり15に分けるとかなりハードな気がする。子どもたちの教育には学校・家庭・地域があり複合的に絡み合っているため、もう少し緩やかなものでも良いのではないかと思う。

委員 教育委員を12年間務める中で、第一次小平市教育振興基本計画の策定に携わった者としては、すばらしい計画に基づいて小平市の教育が進んでいる現時点では安心して感謝している。また昨年から続くコロナ禍の中教育委員会主導のもと学校・家庭・地域の皆様方のご努力により小平市の子どもたちの学習環境が保たれ、学習機会が担保されたことに感謝申し上げる。しかし、小平市の教育が目指す人間像である「社会的に自立し、地域・社会に貢献しながら、他者と共生する人」の実現への道は後退したのではないかと危惧している。GIGAスクール構想の実現には拍車が掛かり、学校におけるIT化はオンラインの授業などにより、必要に迫られる形で進んでいる。一方地域との関わりは希薄となり、それは児童生徒だけではなく、教員や保護者にも言えることではないかと考えている。地域が学校とともに子どもたちを育てるといった小平の良さを取り戻すことがまず必要であると考え。幼いころから地域との繋がりを大切にし、自分の住む地域を故郷と思ってもらえるような体験は、学童期から青年期、成人期と生涯にわたって小平の教育が脈々と受け継がれていくことに繋がると思う。また家庭・学校・地域がそれぞれの立場や視点で教育に関わり、互いの良さを認め合い協力す

ることが子どもたちを育てる上では不可欠である。たくさんの人に関わり育てられた子どもたちが、自分の受けた愛情をまた次の世代に繋げるといった教育の好循環サイクルが生まれることを、今後の小平の教育に期待したいと思う。

教育の世界でよく使われる言葉に不易と流行がある。「不易」とは世の中がどんなに変わっても、変わらないもの、変えてはいけないもの、「流行」とは世の中の変化とともに変わっていくものをそれぞれ意味する。急速に変化する教育環境の中で、子どもたちにこれからの時代を生き抜くための力を着実に身につけさせることが求められている。そのためにも、子どもたちに関わる人たちが協力し合いながら、「子どもたちを地域・社会全体で見守る」という今日まで当たり前のように続けられてきたことが、これからもより求められると思われる。その意味で私は、「不易と流行」という言葉を大事にしていきたいと考える。ここ小平で子どもたちがよりよく生きるための基礎を築き、人と繋がることで支えられ、自分たちも支えられる人になれるのだという心を育むことが、小平全体の成長に繋がっていくことを願っている。

委員長 小平市は全国に先駆けてコミュニティスクールを導入した。コミュニティスクールというのは学校と地域の繋がりがなければ無理である。教育委員会がトップダウンでコミュニティスクールを指定してもなりたないもので、それはそのような環境があったからであるということをお聞きの中からも強く感じた。しかし地域差があるので緩やかなコミュニティスクールということで進めておられると思う。例えば小平第三中学校のように、いろいろな小学校から生徒が集まっている学校では、直ちに第三中学校地域でということは難しいと感じるが、環境は着実に根付いていると印象を受けた。

不易と流行という言葉を使い分けると、不易はいつの時代も変わらぬものとしては、地域同士のコミュニケーションもそうであるが、地域の方々と子どもたちとの関わりは決して負担ではなく、自分も共に学び共に成長していくという観点で、地域の方々と関わっていければ良いと思った。

「教育が必要である」という小話がある。今日、行くところが必要である。今日行って人と関わり、そこで自分なりに自己有用感を感じる必要があるという意味である。コロナ禍においては子どもだけではなく、大人も孤立しているのではないかという印象がある。そういった方々とともに自己有用感を高められるような学校と地域、あるいは地域間の関わりがこれからの教育には必要であると感じた。

半面、流行については時代の変化があまりにも急激である。このコロナ禍を誰が予想できたか、あるいは東日本大震災を経ての原子力神話も崩れた。このような時代の大きな変化に教育環境も極めて急激に変化している。一つは話に出てい

たGIGAスクール構想である。小学校1年生から中学校3年生まで全員がタブレット端末を持ち、コンピューターとしてではなく学ぶ道具として持たされている。もう一つは教員の多忙感である。それは部活動などでの多忙感とは質が違って、教育の大きな変化に、教員がどのように対応していくのかという漠然とした先が見えない多忙感である。これに関しては国においても教員の研修のあり方を見直すなど法令改正を進めている。先ほど個別最適な学びというキーワードが出たが、これからの学びは個別最適な学びが大切である。これは以前から大切にしてきたものである。一人ひとりの子どもたちを大切にしよう、一人ひとりの子どもたちの良さや可能性を最大限引き出そうという教育であるが、このためには教員の多忙感があってはならない。不易と流行の視点からも、今後の小平市の教育のあり方について皆様のご意見をこの計画の中に盛り込めるよう議論を進めていきたいと思う。

8 その他

次回の会議は、3月23日（水）から開催する。